歴教協　神奈川大会　第２１分科会「障がい児教育」レポート

「今まで自分が特別支援学校で実践した「社会認識を育てる授業」を整理する試み（２）　－自分の考えと小林幸雄先生・髙橋　誠先生のレポートのつきあわせ－　」

埼玉県和光市にある NPO 法人ポコ・ア・ポコの障がい児デイサービス「ぽこの実」スタッフ
土田謙次

２０１７（H29）年７月２４日作成

第１部　はじめに（自己紹介）

・私は、１６年間中学校社会科の教師を勤めた後、肢体不自由養護学校２校に１３年間、知的障害養護学校も２校に９年勤務して、昨年２０１６（H28）年３月に定年退職を迎えた後、１年間知的障害校に再任用として週３日間勤務していた。しかしその時に「てんかん発作」を発症してしまい、今年の４月からは、自宅療養をしている身である。

・ただ、保護者の依頼もあり、週１日だけ埼玉県和光市にある NPO 法人ポコ・ア・ポコの障がい児デイサービス「ぽこの実」でスタッフとして働いている。

第２部

１、テーマ設定の理由

私は元は中学校社会科の教員であり、養護学校（現在は特別支援学校）に転勤してからも、社会科を教えたいという気持ちをずっと持ち続けてきた。一方で、特別支援学校では、肢体不自由校の一般学級や知的障害校の高等部の学力の高い生徒達のグループを除いては、「社会科」という教科は教育課程の中に位置づけられていないのが現実である。それは、能力的に理解が難しいということや、必要がないと言った理由からと思われる。

それに対して、埼玉県川口市立鳩ケ谷中学校の障がい児学級担任だった小林幸雄先生は、２０１１年の歴教協福岡大会のレポートで、「障害者の教育に『社会科』を」と題して、次のように述べている。「…日本国憲法の人権・国民主権・平和を教育の基本におき、そこから社会認識の課題を教育課程に設定することが必至である…」

そして私も、特別支援学校においても、それ（社会科＝社会認識の教育）は必要であると考えて、実践してきた。

一方私は、現在は週 １ 日を除いては、自宅療養で家にいる身である。そこでその時間を利用して、今まで２３年間の特別支援学校勤務の中で行ってきた「社会科的内容＝社会認識の教育」を整理して振り返るとともに、その実践を、埼玉県の歴教協の先輩である小林先生や宮城の髙橋誠先生の「社会認識の教育」に関する提言を基に、評価・反省したいと思い、このレポートを書いたものである。そして昨年は、その１回目として以下の様な内容のレポートを書いたが、今年はその２回目として、その内容をできる限り深めてみた。

２、レポートの内容・構成

◎昨年（１回目）

（１）今まで自分が養護学校で実践した社会科的内容を一覧表にして整理する。
（２）小林先生、髙橋先生の「社会認識の教育」に関する提言を自分なりに整理したもの
（３）特別支援学校においても、それ（社会科＝社会認識の教育）は必要であると考えた理由

◎今年（２回目）

（１）今まで自分が養護学校で実践した社会科的内容を一覧表にして整理する。
→再度、自分の実践について、評価をしてみた。
＊**資料①一覧表「今まで自分が特別支援学校で実践した社会科的内容を整理したもの」**の赤字部分参照。

（２）小林先生、髙橋先生の「社会認識の教育」に関する提言を自分なりに整理したもの
→＊**資料②「障がいを持つ子どもにとっての「社会認識」とは何か？」**参照。
→この資料から考えたことは、「３」のレポート本文を見よ。

→＊**資料③「社会認識を育てるステップ表（素案）」**参照。

（３）今までに自分が参加した歴教協大会（０９年～１７年）の「障がい児教育分科会」のレポートの一覧を作成し、その中から資料③に入れられるものを整理してみた。
→＊**資料④「歴教協「障がい児教育分科会」レポート一覧（０９年～１７年）」**参照。

３、レポート本文

資料②で、私が明らかにしたかったことは、「社会認識を育てる教育」＝社会科教育というと、

A…重い障害を持つ子どもたちには、そんなことは難しいしわからないから、教える必要はない。
B…そんなことをするくらいなら、ことば・かずを沢山教えた方がいい。
＊例えば、県西部の K 特別支援学校では「課題別学習は、ことば・かずのみ」と限定。
という意見に対する反論である。

１、B への反論（「『ことば・かず』で十分論」への反論）

障害を持つ A さんが幸せに生きていくためには、「自立した生活をする力」「生活力」「生きる力」が必要だとは、一般的によく言われることだと思うが、では、それらの力はどのように身に付くかというと…

（１）認識面では
①自己認識　②他者認識　③社会認識　④自然認識という 4 つの認識が必要となる。そして「社会認識」を育てるためには、「自己認識」「他者認識」等が土台となり、また、並行して「自然認識」も必要になってくる。

（２）４つの認識の深化を助けるものは
「ことば・かずの力」「コミュニケーションの力」「表現する力」「身体力」「ものを作る力」などである。

だから、言い換えると、「ことば・かずの力」「コミュニケーションの力」等をつけるのも、それが自己目的ではなく、４つの認識を助けるためにしているのだということ。
＝「４つの認識」が目的で、「ことば・かずの力」「コミュニケーションの力」は手段。

２、Ａへの反論（１）（「必用ない論」への反論）

また一方、では「なぜ障害を持つ子どもたちにも社会認識が必要なのか？」というと、障害を持つＡさんが幸せに生きていくためには、「個人が存在する社会の中にあるルールや振る舞い方を身に着け」「自分らしく生きていくこと」（一松麻実子「人と関わる力を伸ばす」より）つまり「社会に適応する力」＝「社会性」を身に着けることが大事だということは、おそらく反対する人はいないだろう。しかし、それだけでいいわけではなく、さらに、「よかれと思う社会を構想し、それを作り、運営し、その社会をさらに良いものに変えていく力。その下地としての「十全な他者認識や他者への共感能力」（門脇厚司「子どもの社会力」より）が必要であり、それは、言い換えると「主権者として社会を変えていく力」を身に付けるためにも必要なのである。

＊このことは「学習指導要領」にも書いてある！→資料②の左下参照。

３、Ａへの反論（２）（「わからないだろう論」への反論）

しかしここで、「重い障害をもつ子どもたちにそんなことできるわけがない」という声が聞こえてきそうだが、どんなに頭が良くても、自分のことしか考えられない人がいる一方で、重い障害を持つ人でも「他者への共感能力」つまり、とても思いやりのある人がいることは、我々のよく知るところではないだろうか。

また、例えば学校卒業後社会に出た時にどういう力が一番必要とされるかというと、数える力や話す力も必要だが、それ以上に、みんなと仲良くやっていく力とか、自分の意志を相手に伝える力とか、好きなものを持っていることとか等と言われる。

つまり「社会認識」とは、高校・大学で習うような難しい理論だけではなく、その土台として、また初期のステップとして、自分のことを知ること（自己認識）、他人＝自分の周りの家族や友達や先生のことを知ること（他者認識）。そしてそれらの人たちとコミュニケーションを取り、仲良くやっていくこと。「仲良く」というのは、遊ぶことだけでなく、みんなで一緒に勉強をしたり、作業をしたりすること。

また時には喧嘩をしたり、何か問題が起こったら、それを解決しようと試みること。そうした意欲や態度、能力こそが、「社会認識」のファーストステップであり、よりよい社会を作っていこうという主権者の基本だということ。

ここで、一つの例として、思い浮かぶのが、前任校でのＩ君への指導である。Ｉ君は、身体が弱いために両親に大切に育てられたこともあってか、自分の興味・関心のある事柄があると、そこからの切り替えが苦手で、授業が始まっても教室に入れなかったり、手に持っているものを離すことができなかったりすることが多かった。その時に私は、Ｉ君の興味・関心のあるものを受容し、共感を示しつつ、でも「今は〇〇する時間だよ。Ｉ君が来ないとみんなも心配するし、授業がはじめられなくて困っていると思うよ」と言って説得しようとした。しかし、Ｉ君のことを数年前から知っている教員は、確かに彼の特性もよく知っているので、iPad 等で彼が好きな音楽や画像等を見せて、気持ちをそちらに向けて切り替えさせようとし、成功していた。私はこのやり方を否定するものではないが、このやり方だけでは足りないと思った。それは、まさにこの場面でも「自分がここでやりたいことをしていることで、友達や先生がずっと待っている、僕が来なくて困っている」ということを感じさせることこそが、社会認識を育てる教育だと思うからである。

４、再びＢへの反論（「発達段階論」への反論）

また、そういうと、では障害の重い子はそういう「自己認識」「他者認識」等のことさえできればいいのであり、それ以上の「社会認識」は必要ないという声も聞こえてきそうだが、これもよく言われるように、障害を持つ子どもたちの関心・意欲や能力は、健常の子どもたち以上に凸凹が大きく、ファーストステップのことさえ繰り返し学習していれば完全に身に付くというものではなく、ちょっと難しいけれど次のステップに進むことで、関心・意欲が高まり、はじめはで

きなかったこともできるようになったということはよくあることである。

従って、資料③の「社会認識を育てるステップ表（素案)」を参考にしながら、「社会認識を育てる授業」を進めていってほしい。

４、みなさんに伺いたい点

資料②③について、どう思われるか？　特に資料③の「ステップ表」の上の項目がこれでよいのか悩んでいます。まだまだ不十分なものなので、皆さんの率直な意見を伺って、さらに内容を深め、来年度のレポートでは、一応完成させたいと思っています。